

『ツーリズムにおける哲学的諸問題』 所収論文・解説と翻訳【2】

「ツーリズムの終焉？ノマドロジーとモビリティ・パラダイム」(Sunderland 大学教授 Kevin Hannam 著) について

(解説と翻訳) 神戸夙川学院大学講師 原 一樹

【目次】

1. 解説
2. 翻訳
3. 参考文献

1. 解説

本稿は、英国 Surrey 大学 John Tribe 教授編集・2009 年出版の『ツーリズムにおける哲学的諸問題』(“Philosophical Issues in Tourism”, Channel View Publications) に収められている、Sunderland 大学 Kevin Hannam 教授による論文の解説と翻訳である。

『ツーリズムにおける哲学的諸問題』は、「哲学的」と銘打つ著作にふさわしく、ツーリズムに対して「真」・「善」・「美」という 3 つの角度からアプローチする 16 本の論文が収録されている。いわゆる「倫理的ツーリズム」や「スピリチュアル・ツーリズム」に関する論文も収録されているが、その中でも Hannam 氏の論文は、「ツーリズムの終焉？」という刺激的なタイトルの下、著名な社会学者 John Urry 氏らにより展開されつつある「モビリティ」概念を軸に据えた包括的社会理論や、20 世紀を代表するフランス人哲学者ジル・ドゥルーズが盟友フェリックス・ガタリと共に生み出した「ノマド(遊牧民)」という形象を参照しつつ、流動性や移動性が高まった現代のグローバル化社会における「ツーリズム」の意味について検

討する興味深い論考である。いささか抽象度が高い議論が続くこともあり、Hannam 氏の議論を十分に理解するには自らの手で氏が参照する理論家の言説に赴く必要があるが、氏の論考はツーリズム研究と社会理論、更には哲学的言説を繋げることを試みる先駆的研究だと言えるだろう。

訳出に際しては、“mobility”の語を「移動性」や「可動性」とすることも考えたが、新たな社会理論のパラダイムを構想する中心概念として提出されていることにも鑑み、敢えて「モビリティ」とした。その他、訳者の拙い語学力およびツーリズム理論に関する浅学の故、思わぬ誤訳をしてしまっている可能性は否定できない。読者諸賢の御指摘・御叱責を待つのみである。なお、人名に関しては参考文献利用の便宜や訳出の困難さに鑑み、原則として英語表記を残した。

2. 翻訳

はじめに

この章では、ツーリズムをより広い社会理論へと位置づける。前提として、ツーリズムはもはやそれ自体としては存在しておらず、モビリティと言われるより広い存在論的文脈内部の特定のプロセスとして理解されねばならないと考える。まずはモビリティ概念について素描することから始め、その後、ドゥルーズに触発された、モビリティに関する最近のポスト構造主義的説明(いわゆるノマドロジー、或いはノマド哲学)の強みと弱みを

議論しよう。このような理論は実証主義における「実証された諸命題の秩序立ったシステム」ではなく、実在を社会的に構築する手法であり、新たな諸問題を問うとみなされるものである。(Calhoun1995:4-5)

その後この章では、最近になり主張されている新たなモビリティ・パラダイムの様々な理論的諸側面に光を当てる。とりわけ、いかに権力についての概念化が相対的モビリティと日常生活の不動性に関する存在論的理解を深める為に用いられてきたかに注意を促したい。現代的モビリティは、日常的移動の局地的プロセスや日常生活における公共空間移動、物質的事象の移動と同様に、世界中に展開する人々・物質・資本・情報の大規模移動をも包摂するものだと言われている。(Urry2007)その後、輸送とコミュニケーションに関する近年の進歩が、モビリティに関する新たな社会的文化的実践(ツーリズム形態を含む)と共に、いかに新たな研究を創発しているかを検討する。最後に、モビリティに関する方法論を議論しよう。

モビリティを理解する

『移動について』という彼の基本的な書物において、Tim Cresswell (2006) はモビリティ概念を議論している。批評家達はモビリティ概念を刺激的だが見逃されがちな研究対象だと言うわけだが、彼によるとそれは学術的書物の中に遍在する。モビリティは存在の基本的な地理学的側面であり、「・・・そこから様々な語りや—そして実際にイデオロギーが構築されうる、或いは実際に構築されてきた肥沃な土壌である。」(Cresswell2006:1) 歩くこと、転居すること、休暇先に移動すること、移民すること、旅行することや探検することは、何らかの意味でモビリティの様々な形式である。しかしながら、近代西洋社会で広く流通してきた多くの意味合い—進歩としてのモビリティ、自由としてのモビリティ、機会としてのモビリティ—

にもかかわらず、「モビリティ」そのものやそれが何を意味するかは、相対的に明瞭化されて来なかった。

モビリティはあらゆる種類の固定性と対照的に表現されてきた。「それは場所、根付いていること、基礎、安定性の対照物として置かれる或る種の空白の空間である。」(Cresswell2006:2) モビリティの最も単純な理解は、それが或る種の移動—場所間での運動を含む—というものである。「運動とは、類型や戦略、その運動の社会的含意が考慮される以前の一般的な移動の事実である。」

(Cresswell2006:3) 場所間での対象移動は時間を消費し、空間を横断する。故に、移動は時間と空間から成る。更にはっきり言えば、それは「時間の空間化と空間の時間化」である。時間と空間は運動に文脈を与えると同時に、運動の結果でもある。しかし決定的なことに、(人間や他の諸事物の)運動は常に意味深い—即ち、権力の生産者であり生産物でもある。故に Cresswell によれば、運動よりも寧ろモビリティが「場所」のダイナミックな等価物とみなされることとなる。まさに「場所」は「位置」と同じ程度に中立的なものではない。場所—それは様々な意味や権力により色をつけられている—は、常にモビリティと同じように経験される。「モビリティはまさに空間的—地理学的—であり、また場所と同じように人間の世界経験において中心的である。」(Cresswell2006:3)

この観点から見るとモビリティは関係を持つ 3 つの諸契機から捉えられうる。(Cresswell2006) 最初に、輸送計画や移民理論において明白であるのは、潜在的に観測可能で測定可能な事実—経験的実在としてのモビリティである。ここでモビリティは純粋な動きを意味し、その最も抽象的状态にある。モビリティについてのこの抽象的概念はしばしば空間的規模を超えてきた。例えばウィリアム・ハーヴェイによる人間の血液循環システムの発見がそうである。即ち、健康が「循環」と連結することになった。この循環という考え方は次

に都市計画の新たな文脈に現れた。「動脈」や「静脈」という語が新しい都市計画者達の言説において馴染み深いものとなったのだ。

次に、モビリティは様々な表象様式—映画、写真、文学、哲学、法—を通して伝えられもした。モビリティに関するこれらの諸表象は極めてイデオロギー的な意味を生み出すものである。ここでモビリティは「自由、侵犯、創造性、生そのものと同義語になる。」(Creswell2006:3)

モビリティに関する第三の契機は、実践され、経験され、具体化されるモビリティという契機である。人間のモビリティはそれ自体、深く具体化された経験である。そして人間のモビリティの直接的経験はモビリティに関する表象的意味と結びついている。同様に、モビリティに関する表象はモビリティが具体化され実践される手法に基礎を置いている。故に、私達は統合プロセスとしてのモビリティの諸契機を読解する必要があると主張されるのである。Creswell は言う。「モビリティを表象への参照無しに理解することも、他方で物質的身体性無しに理解することも・・・ポイントを外してしまう。」(Creswell2006:4)

Creswell (2006) は更にこう続ける。近代西洋社会におけるモビリティ感覚の変容は歴史的に跡付けることができる。ヨーロッパ封建社会においては、モビリティは贅沢品であった。土地での労働に含まれる持続的モビリティは存在したが、モビリティの規模は巡礼や戦争を除けば限定されていた。ヨーロッパ近代初期における商業資本主義の勃興は交易と関係するモビリティを促進し、最終的には封建社会の土地拘束性を緩和した。その代わりに、発展した新タイプのモビリティは新たな社会監視とコントロールの形式を必要とした。ヨーロッパ国民国家の形成は商品と賃労働とに対しより広いマーケットをもたらした。労働は国家規模で移動可能なものとなり、そうなることでモビリティを制御する封建権力は衰退していった。イデオロギー的レベル、及びより世俗的レベルに

おけるモビリティの変容に伴い、人々はヨーロッパの幅広い地域に住み着くこととなった。モビリティは権利となったのだ。即ち、国民国家内部全体を移動する権利である。そこには他の近代的な移動する存在、つまりツーリストの出現が伴っていた。

よって一つの概念としてのモビリティは、比喩的に流通してきたものである。モビリティに関する多くの比喩は、ノマド、放浪者、ツーリスト、(外国に渡り住み込みで働く) 家政婦、船、そしてホテルを含む。そしてこれらが社会的空間的モビリティに関する現代の言説を満たしているのだ。例えば人類学者ジェームズ・クリフォード(1997) は、現代世界は希望に満ちて旅をし、連結を作り速度を経験するノマドや旅行者達の新たなモビリティの世界によって特徴づけられると言った。彼は家庭や固定性の比喩に対して、ホテルのロビーの比喩を利用する。ホテルのロビーは運動や予期せぬ出会いに開かれたステージを作り上げるものだ。こうして、哲学の古い形式の一見したところの固定性は、モビリティに関する様々な比喩により疑問に付されることとなった。

ノマドロジー

認識論的レベルでは、モビリティの理論化は定住者の形而上学がノマド的形而上学により論証を経て代替されてきた場所で領域侵犯的特徴を持つようである。例えば Deleuze と Guattari(1988:52) はその哲学的言説において、平滑的で可動的な空間のモチーフとして、或いは社会の脱領土化のモチーフとして、ノマドという形象を用いている。「ノマドは点も、道も、土地も持たない。・・・もしノマドが卓越して脱領土化したものだと言われうるとすれば、それはまさに移民のように事後的な再領土化が存在しないからである。」Cresswell は説明する。「移民が場所から場所へと動き、心の内に安らぎの場所を持ちつつ移動するのに対し、ノマドは道を定めるのに点や場所を用いる。・・・ノマ

ドは決して再領土化しない。到着した場所の秩序立った空間へと移民が逆戻りするのとは違うのである。」(Cresswell2006:49) Urry(2000:24)は更にこう説明する。「ノマド主義は、学術的で政治的な言説がそれ自身一つの旅として認識されうるという概念と結びついている。理論を創るためには、人は家を出て旅をする。理論家がそこから出発してそこへと戻るような“家”や固定した点は存在しない。理論家とは、家にも余所にも留まらず、希望を持ちつつ旅をする存在だとみなされる。」今や我々が向き合うのは、このモビリティに関する思考であり、哲学に対してである。

多くの西洋哲学は社会的秩序であれ空間的秩序であれ、世界における秩序の探究に専念してきた。事物がいかに作動するかに関するパターンやプロセス、モデルや理論が提出されてきた。しかしながらその気質に反して、西洋哲学には常に生の秩序化ではなくその基本的な無秩序と複雑性を理解しようとするもう一つの運動が存在してきた。この運動は近代西洋社会と科学的理性の両者に関するニーチェ的な批判を展開するものである。この運動のクライマックスは、フランスのポスト構造主義者ジル・ドゥルーズとミシェル・フーコーの仕事の内に見出される。彼らは知識の生産を批判し、見出されるべき客観的真理や秩序など存在せず、寧ろ全ての知識は力の諸関係に巻き込まれていると主張するのである。「自らと関連を持つ知識領域の構成を伴わない力—関係は存在しないし、同時に、力—関係を前提し構成しない知識なども存在しない。」(Foucault1977:27) フーコーによる近代批判は、近代社会の誕生は解放過程ではなく新たな規律権力—知識体制の設立に過ぎないと主張する。(Cheong&Miller2000, ツーリズムの文脈で参照せよ。)

他方、ドゥルーズによるノマド主義的批判も同様な戦略を採る。D'Andrea(2006:107)は次のように言う。

ノマドロロジーは国家や科学、文明化の定住的論理を暴露し超克しようとする批判的思考のスタイルを指す。・・・それは、脅威、逸脱、問題と見做される放浪者に対し定住者を積極的に評価する、文明化の持つカテゴリー的な二項対立を批判する。・・・モビリティに対する固定性の優位、道のりに対する根付きの優位は、慣習的な主観性の様態に依拠している。同一化と他者性との弁証法は、堅固で排他的な境界線内に自我を拘束する同一性モデルを維持するものである。

『千のプラトーン』でドゥルーズと共著者フェリックス・ガタリは「必然的に条里化される社会的世界を含意する、ヒエラルキー的で、構造化されていて権威主義的な樹木と根の比喻に対し、リゾームの比喻を対置する。リゾームの根は水平に分岐し、領土へのあらゆる拘束を逃れるもので、アナキーで包含しつくせない多様体である。」

(Callinicos2007:333) ドゥルーズとガタリは言う。「リゾームは意味的連鎖や、権力組織や、芸術や科学や社会闘争に関連する状況の中で絶え間なく連結を創り出す。」こうして、リゾーム的思考はアムステルダム運河を遊歩することに例えられ、多くの西洋哲学が持つ構造化された二項対立的思考に對比される。(Shurmer-Smith&Hannam1994) 故に、このようなノマド的思考は私達に社会的同一性について考え直させる。例えば「社会的同一性とは常に流動的でプロセスの最中にあり、部分的には自分で自らを構築するが、部分的には他者によるカテゴリー化を受けていて、また部分的には条件、ステータス、ラベル、武器、盾、記憶の蓄積等々でもあるようなものだ。それはブリコラージュを通して構成されるクレオール化された集積である」というように。(Malkki1992:37)

更にドゥルーズとガタリは基本的に2種類の時空に私達が住んでいると言う。条里空間は過度に秩序づけられていてセグメント化されており、ちょうど私達の正確な方位や方向を与えてくれる地

図のようなものである。ノマド的空間、平滑空間はセグメント化されていない、方向無しの変化性を持つ。しかし、「平滑一条里という単純な対立は更に困難な複雑化や異化、重合を生み出す。・・・なぜならば差異とは客観的なものではないからだ。砂漠や草原、海で条里的に暮らすこともできる。都市の中で平滑的に暮らすこと、都市のノマドと成 る こ と も で き る 。

」

(Deleuze&Guattari1988:481-482)

資本や人や物資のこのような流れは現代世界のグローバルなハイパーモビリティを特徴づけており、D'Andrea(2006:98)は「同一性や主観性の形式へのハイパーモビリティの衝撃を示す概念的基盤としてのノマド主義人類学とノマドロロジー哲学との対話」を提案する。しかしながら、この対話の問題点は、ノマドという形象に関する隠されたロマン主義化である。Creswell(2006:54)は言う。

「・・・ノマドの使用はしばしば想像上の新植民地主義の形式以上のものではない。」ノマドロロジーの認識論的前提は、西洋社会とその合理的抽象的科学への有益な批判かもしれないが、私達が前進できるのはモビリティに関する存在論的理解においてのみである。

故に Urry(2003:101)は、「グローバルに統合されたネットワーク」(GINs)に沿って**全体的に**組織化されていて、時間－空間的拘束を無化する予見可能な連結を伴う永続的構造(多国籍企業など)として社会を捉えるのではなく、「グローバルな流れ」という存在論的概念を提示する。「グローバルな流れ」とは、その形がでこぼこしており、偶然的、予見不可能で、「自らの活動文脈を時間の中で創造する」ような、高度なモビリティを持つ粘着質構造である。他方 Hannam(2006)は、私達が人間行動に関する適切な存在論的説明を展開できるのは、(ツーリズムもその一部を為す)現代のグローバルな複雑性を産み出すモビリティと不動性・固着性との組み合わせ(平滑的なものと条理化されたものとの組合せ)の分析においてのみであると

認めている。

モビリティ・パラダイム

ツーリズムはますます、正常な日常生活の外部で実践される社会生活の周縁的な一側面だとはみなされなくなっている。むしろそれは、政治的経済的進展のより広いプロセスに統合されるものであり、日常生活を構成するものだとさえみなされている。(Franklin2003,Edensor2007)確かに、Franklin and Crang(2001:3)はこう指摘している。「ツーリズムは当初より、相対的にマイナーな近代的国民生活の周縁的儀式であることから逃れ、それを通して超国家的近代生活が組織される意味深い様態に成ってきた。」故に、指摘されているのはツーリズムの終焉というよりは寧ろ、現代的モビリティに対する私達の理解の始まりである。

(Sheller&Urry2006:1)は、「社会科学の中に、“新たなモビリティ”パラダイムが形成されつつあるように思われる」とまで言う。モビリティという概念は、日常生活における公共空間移動や物資移動といった日常輸送のローカルなプロセスと同様、人間や物資、資本や情報の世界中での大規模な運動を位置づけるものだと彼らは明瞭に主張する。実際、Urry(2007:18)は更にこう言う。

「モビリティという“レンズ”を通して考えることは、他と区別される社会科学を与える。・・・モビリティ・パラダイムは、それが人々や観念等の様々な移動に対する無視や怠慢を治癒するという意味で実質的に異なるのみではない。それは社会科学を変容させるものであって、他の理論的方法論的風景を正当化する。・・・そのパラダイムは多くの場合目立たず、目につかなかった理論や方法、研究事例を前面に持ってくる。」

こうして、モビリティに関するポスト・ディシプリンの視点からは、単なる**それ自体**としてのツーリズムという概念は、今やむしろ時代遅れのものではないかとみなされることとなろう。

「人々や物資、飛行機やスーツケース、植物や動物、イメージやブランド、データシステムや衛星、これらのものの移動全てはツーリズムを“実践する”ものである。ツーリズムはまた、記憶や運動、ジェンダー化され人種化された身体、感情や雰囲気に関係を持ちつつ移動することに関わる。」(Sheller&Urry2004:1)

再度言えば、ツーリズム、より重要なことに旅行は、社会生活を構成する必須プロセスとみなされるようになりつつある。これは単に別荘購入やツーリズムと移民との繋がりに関することではない。寧ろ、全ての物事が世界中での絶えざる運動に見えるということである。学者、テロリスト、ツーリスト、軍人、ビジネスマン、ホームレス、セレブリティ、移民、難民、バックパッカー、通勤者、学生、友人・・・といった多くの人々が旅をする。そして世界中の飛行機、列車、船、バス、自動車、通りを満たすのである。現代世界における政治や技術、財政や輸送に関する全ての変化が、多くの人々にとってモビリティへの障壁を低くするのに十分意味があった。故にツーリズム、レジャー、輸送、ビジネス、旅行、移民、コミュニケーションの境界線はぼやけ、個別に分析されるよりも、それらが流動的に相互依存しているままに、統一的に分析されるべきである。(Sheller&Urry2006,Hannam2006)

一方で物理的に、潜在的に場所間を移動することは、バックパッカーなどのツーリストにとって地位と権力の源泉となりうる。(Richards&Wilson2004,Hannam&Ateljevic2007)他方、モビリティが強制される場所では、それは世界中の移民や難民にとっての疎外や、ツーリズムによるモビリティを前にした諸部族の強制的な再移住の枠組みをもたらす。(Indra1998,Kofman2002)このようなモビリティや不動性は特にいわゆるツーリズムの「接触区域」であらわになっている。それは国家間の狭間

にあり、「市民権」概念が強く疑念にさらされていて、多数のアイデンティティがますます流動的なものとなっている場所である。

(Bianchi2000,Sparke2006) 故に現代的モビリティを分析することは、様々な速度の流れにある諸社会に位置づけられる、様々な人々や場所にとっての多くの結果の考察を含むこととなる。(Sheller&Urry2006,Hannam2006)

ツーリズムにとってのモビリティ問題

ツーリズムをより広いモビリティ・システムの一部と見なし続けることを試みる際に、私達はモビリティ研究にとっての大まかな問題を描き出すことができる。例えば私達はツーリストがいつどのようにして移民になるかと問う必要がある。(O'Reilly2003)移民や回帰移民、トランスナショナリズムとツーリズムとの関係は更に研究される必要がある。そして勿論ここで、物理的移動が上方への、或いは下方への社会的移動とどう関係するかも中心的な問題である。このような文脈では私達は、ツーリストが上述のいわゆる「接触区域」で自らのアイデンティティや市民権概念をいかに処理するかを検討する必要がある。更に、ツーリストが絶えず移動中である、ハイパーモバイルな存在であるとみなすことは恐らく過度に単純な見方だろう。実際にツーリストであることは、時に自らの選択により、或いは経済的事情により、場所に滞在することや相対的に動かないこと、よりゆっくりとしたコースにいることとの関係が深い。場所や技術や「ゲート」は或る者達のモビリティを強化する一方で、他の者達の不動性(脱モビリティ化)を強化する。そして勿論このようなモビリティ(や不動性)はまた、強くジェンダーの問題を含み、年齢に応じた特有のものである。

存在論的レベルでは、世界規模での人間のモビリティという幅広い文脈におけるこのようなツーリズム研究は、モバイル情報通信技術や生まれつつある安全と監視の為のインフラについての更に

「技術的」な関心に結び付けられるのと同様に、日々の移動や物質文化、空間関係についての更に「ローカル」な関心とも結び付けられる必要がある。社会生活はしばしば遠距離を繋ぐ多様で引き伸ばされた連結に満ちているように思われるが、これらは特定の結節点を通して組織化されている。モビリティはこれら結節点の周囲の新たな社会生活形式を共鳴させるはっきりした社会空間を必要とする。例えば駅、ホテル、高速道路、リゾート、空港、レジャー複合施設、コスモポリタン都市、ビーチ、ギャラリー、ロードサイド・パーク等である。或いは連結はより特権化されていない空間を通して実行されるかもしれない。即ち、通りの角や地下鉄の駅、バス、公共広場や裏通りである。また、輸送に関する多くの研究に反して、旅行に費やされる時間は人々が最小化を望む死んだ時間ではない。輸送に関する論文は旅行を活動から区別しようとする傾向にあるが、登場しつつあるモビリティ・パラダイムは活動が移動中に生じると仮定し、移動中であることは「引き起こされた」諸活動のセットを含みうるとする。(Lyons&Urry2005) によって、登場しつつあるモビリティ・パラダイムの中に位置づけられるツーリズム研究は、ツーリストが経験する様々な様態の旅行が持つ具体化された本質と経験を検討するものとなるだろう。そして部分的に旅行のこれらの様態を物質的で社会的な「移動中の一住居」の形式、様々な活動が生じる場所、様々な活動の為の場所とみなすものである。(Jokinen&Veijola1994,Crouch2000,Johnston2001,Featherstone2004) これらの「活動」は特定の会話や労働や情報収集の形式を含むことができるが、単に繋がっているという事柄のみを含むこともできる。その場合、身体的存在が多くのやり方で様々な集まったり散らばったりするポテンシャルを持つ形で、移動しながら他者と存在し続けることとなる。モビリティからの視点は空間性や尺度に関する私達の日常的考えを捨てるよう導

くのみならず、時間性やタイミングに関して存在する線状的な想定を無根拠化するものでもある。この想定に従えば、行為者は一度に一つの物事しか為しえず、出来事はそれぞれに線状の秩序で生じるとしばしばみなされている。(Hannam2006)

更に、しばしば場所とその場所を旅行する人々との間には明瞭な線が引かれる。度々、場所は人々を訪問させるプル要因やプッシュ要因とみなされてきた。場所は相対的に固定され与えられたもので、そこを訪問する人々とは区別されるものと想定されている。その代わりに私達は、場所という概念は誤って単純なものだと思われているが、問題として取り上げられる必要があると考える。

(Shurmer-Smith&Hannam1994,Creswell2004) 故に、登場しつつあるモビリティ・パラダイムは「場所」と「人々」とを区分する存在論に反して議論を立てる。寧ろ、活動や活動性を通して連結された場所と人々との複雑な関係性が存在する。(Edensor1998,Sheller&Urry2004,Knox2001) モビリティの持つ物質性を再認識するにあたり決定的なのは、私達がそれを通して場所や運動を感覚し感情的地理を構築する、感性的乗り物としての物質的身体を再び中心に据えることである。

(Crouch2000,Bondi2005) 例えば想像上の旅行は、想像力の中で「場所の雰囲気」を経験し予期することを含む。雰囲気は物質的インフラや表象の言説には還元不可能なものである。旅行手段と旅行者との間には複雑な感覚的關係性がある。(Rodaway1994) 故に私達はモビリティの文脈で、ツーリズムの感覚的・感情的な地理に関してより良い地図を必要とすると議論できる。

モビリティに関する方法論

モビリティに関する私達の哲学的で概念的な議論を経て、ここで手短かにモビリティに関する方法論の議論に目を向けてみよう。もし私達が十分に現代のモビリティ存在論を理解し、モビリティ・パラダイムが真に登場しつつあるとすれば、私達

は現代の（脱）領土化された社会生活の流動的な（無）秩序や（脱）埋め込みを「捉える」為にモビリティに関する方法論をも必要とするだろう。私達はこの研究を遂行する為にはモビリティ民族誌が最良の方法を提供すると考えるが、モビリティ民族誌は高度に局地化された慣習的民族誌とは区別されねばならない。

（Appadurai1996,Marcus1998）データ収集方法は更に「フレキシブルで形式張っておらず、文脈依存的で、その柔軟性の点で研究対象であるモビリティの主体を模倣する部分を持つ」必要がある。

（D'Andrea2006:113）彼または彼女の視点を拡張することで、民族誌学者は「不明瞭な環境に高速で伝わる、ゆっくり動く実体の震えを知覚し経験するだろう。」（D'Andrea2006:114）故にこのような研究は「位置の繋がりや道筋、細流、結合、併置の周囲でデザインされる。そこで民族誌学者は、民族誌の議論を事実上定義する、場所間における連合や連結の明白な論理を伴いつつ、正確で物理的な存在の諸形式を立証する。」（Marcus1998:90）

D'Andrea(2006:114)は主張する。こうした研究は、

「ハイパーモバイルな現象を含む政治経済学的で社会—文化的なプロセスを考慮すべきである。経済的レベルでは、物質的文脈がいかなる役割を果たすかを問う必要がある。文化的レベルではこう問われねばならない。与えられた場所や回路においてハイパーモバイルな構造に参加する主体に含まれている動機や意味の本性は何か。いかにして特定の経験や意味の場所が彼等の日常生活を支えているか。そして、いかにしてこれらの場所が主観性の形式を構成し表現する儀式的実践や、ハイパーモビリティと重なり合っている親密さや社会性を主宰しているか。」

故に Appadurai(1996)は、「トランスローカルな場所に関するマクロ民族誌」を提案する。D'Andrea(2006:115)はこれを展開し、モビリティ民族誌は3つのレベルで展開されうると主張する。第一に、モビリティ的な主体性、ライフスタイル、アイデンティティについての民族誌が存在しうる。

研究者は、それぞれの特定の地理的場所で「ハイパーモバイルな構造を局地的に構成する下位場面や実践や想像上のものを同定し翻訳せねばならない。」第二に研究はモビリティの諸場面、諸主体、諸コミュニティの社会経済的文脈を分析する必要がある。「経済（ツーリズム・レジャー・広告）や主流／傍流の道德性や、国家による監視が、どのようにモビリティ的な主体と脱領土化されたコミュニティの軌道や戦略に影響を与えるかを理解する必要がある。」そして第三に、多様な場所に関するトランスローカルな民族誌により私達は、様々な場所でのハイパーモバイルな構造の流動的で結合的な本質を同定できる。ここで研究者は「どのトランスローカルな流れや回路やウェブが、いかにしてハイパーモバイルな主体やコミュニティを維持するか」を理解できる。（D'Andrea2006）「移動の只中にある」このような研究手法は、現代の社会生活におけるモビリティ、不動性や固定性に関して、新たな批判的視点を与えるだろう。

結論

この章ではツーリズム研究をより広い社会理論の文脈へと位置づけた。その前提は、ツーリズムはそれ自身としてはもはや存在せず、それはより広い存在論的文脈、即ちモビリティ（モビリティーズ）の特定のプロセスだと理解される必要があるというものである。議論したように、ノマドロジーの強さは認識論的レベルでの西洋科学への批判である点にある。しかしながら、その弱さはノマドという形象を存在論的にロマン主義化する点にある。モビリティ存在論は現代のグローバル化社会の複雑さの分析を通してこの点を回避しようとする。最後にこの章では、モビリティに関する方法論がいかにして現在の研究における方法論的停滞を打破しうるかを証明しようと試みた。

3. 参考文献

- Appadurai,A.(1996)
Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization.Minneapolis,MN
:University of Minnesota Press.
- Bianchi,R.(2000)
Migrant tourist workers:Exploring the contact zones of post-industrial tourism.
Current Issues in Tourism3(2),107-137
- Bondi,L.,Smith,M.,and Davidson,J.(eds)(2005)
Emotional Geographies. London:Ashgate.
- Calhoun,C.(1995)
Critical Social Theory. Oxford:Blackwell.
- Callinicos,A.(2007)
Social Theory: A Historical Introduction.
Cambridge:Polity.
- Cheong,S-M.and Miller,P.(2000)
Power and tourism:A Foucauldian observation.
Annals of Tourism Research27(2),371-390
- Creswell,T.(2004)
Places:A short Introduction.Oxford:Blackwell.
- Cresswell,T.(2006)
On the move:Mobility in the Modern Western World.London:Routledge.
- Crouch,D.(2000)
Places around us:Embodied lay geographies in leisure and tourism.Leisure Studies19,63-76.
- D'Andrea,A.(2006)
Neo-nomadism:A Theory of post-identitarian mobility in the global age.Mobilities1(1),95-120
- Deleuze,G and Guattari,F.(1988)
A Thousand Plateaus.
London:TheAthlone Press.
- Edensor,T.(1998)
Tourists at the Taj:Performance and Meaning at a Symbolic Site.London:Routledge.
- Edensor,T.(2007)
Mundane mobilities,performances and spaces of tourism.
Social&Cultural Geography8(2),199-215.
- Featherstone,M.,Thrift,N.,Urry,J.(eds)(2004)
Cultures of automobility (Special issue).
Theory,Culture and Society21,1-284.
- Foucault,M.(1977)
Discipline and Punish. London:Allen Lane
- Franklin,A.(2003)
Tourism:An Introduction.London:Sage
- Franklin,A. and Crang,M.(2001)
The trouble with tourism and travel theory?
Tourist Studies1(1),5-22.
- Hannam,K.and Ateljevic,I.(eds)(2007)
Backpacker Tourism.Clevedon:ChannelView.
- Hannam,K.,Sheller,M.,Urry,J.(2006)
Editorial:Mobilities,immobilities and moorings.
Mobilities1(1) 1-22.
- Indra.D.(ed.)(1998)
Engendering Forced migration.
Oxford:Berghahn.
- Johnston,L.(2001)
(Other)bodies and tourism studies.
Annals of Tourism Research 28(1),180-201.
- Jokinen,E.and Veijola,S.(1994)
The body in tourism.
Theory,Culture&Society 11(3),125-151.
- Knox,D.(2001)
Doing the Doric: The institutionalization of regional language and culture in north-east Scotland.
Social&Cultural Geography2(3),315-331.
- Kofman,E.(2002)
Contemporary European migrations,civic stratification and citizenship.
Political Geography21,1035-1054
- Lyons,G. and Urry,J.(2005)
Travel time use in the information age.
Transport research A: Policy and Practice

39(2-3),257-276

Malkki,L.(1992)

National Geographic:The rooting of peoples and the territorialization of national identity among scholars and refugees.

Cultural Anthropology7(1),24-44

Marcus,G.(1998)

Anthropology Through Thick and Thin.

Princeton,NJ:Princeton University Press.

O'Reilly,K.(2003)

When is a tourist? Tourist Studies3(3),301-317

Richards,G. and Wilson,J.(eds)(2004)

The Global nomad:Backpacker Travel in Theory and Practice.Clevedon:

Channnel View Publications.

Rodaway,P.(1994)

Sensuous Geographies:Body,Sense,and Place.

London:Routledge.

Sheller,M.and Urry,J.(2006)

The new mobilities paradigm.

Environment and planning A38(2),207-226.

Shurmer-Smith,P.and Hannam,K.(1994)

World's Desire,Realm's Power:

A Cultural Geography.London:Edward Arnold.

Sparke,M.(2006)

A neoliberal nexus:Economy,security,and the biopolitics of citizenship on the border.

Political Geography 25,151-180

Urry,J.(2000)

Sociology beyond Societies:Mobilities for the Twenty-first Century.

London:Routledge.

Urry,J.(2007)

Mobilities.Cambridge:Polity.